

情報モラルと道徳① ～資料とのコラボを考える～

北川 忠



1 情報モラルと道徳の時間

情報モラルのみを指導して、道徳とすることはできない。情報機器の操作や危険回避の方法などの練習は大切ではあるが、道徳の時間に情報モラルを指導するなら、問題の根底にある部分に触れることで、児童が考えを深めることができるようにしなければならない。

2 コラボする情報モラル—テーマは「いじめ」

では、道徳の時間にどのようにして情報モラルを取り入れればいいのか。 「単独でだめならコラボすればいい」 そう考えた私は、光文書院『ゆたかな心』に掲載されている情報モラルのコラムと、通常の資料の二つを使用することにした。今回紹介する「あなたはだーれ」（6年生・情報モラル）の内容は、「ネットいじめ」である。ならばコラボする相手は同様の資料がいい。やや迷ったが、「森川君のうわさ」を使うことにした。

この資料は、4 - (2) 公正・公平、正義の内容項目であるが、2 - (2) 思いやり・親切として取り扱う。資料の「ぼく」は傍観者の立場をとったため、森川君が仲間外れになってしまう。いじめはいじめた者だけでなく、放置した傍観者もいじめた側になることに気づかせて、相手の立場に立って考えることの大切さを深めたいわけだが、ここに「ネットいじめ」を絡めることにした。

3 ねらい

- 相手の立場に立って考えることで、だれに対しても思いやりの心をもつ。
- ・自分に関係のない人に対しては、間違っていることでも信じてしまう心があることに気づく。
- ・自分に置き換えて考えることで、間違ったうわさはとても不愉快であることがわかる。
- ・真偽があいまいなことをうわさすることは、いじめであることがわかる。
- ・だれに対しても相手の立場に立って考えることで、思いやりの心をもとうとする。

上記のねらいは、2 - (2) を情報モラルの側面から考えたねらいである。「ネットいじめ」の根底にある心は、匿名性を利用した卑怯な心であ

り、悪いうわさをうかつに信じてしまう人間の弱さであるから、傍観者になるのではなく、相手の立場に立って考えることで、よりよい人間関係を築いてくれることをねらっている。

4 授業の流れ

まず、「○○死ね」という落書きや「○○が万引きした」といううわさを見たり聞いたりしたときに、○○が、①知らない人②友だち③自分で、それぞれどのように受け取り方が違うかを確認させる。そして、自分に関係ない人の場合はあまり関心をもたず容易に信じてしまうが、友だちや自分の場合は他人事ではいられなくなり、怒りや悲しみの気持ちが強くなるという心の傾向性が、だれにでもあることに気づかせておく。

次に資料「森川君のうわさ」を読み、「ぼく」はいじめめる側か いじめられる側か無関係かを考えさせる。すると、児童は知っていて何もしなかったという理由から、「ぼく」はいじめめる側であると考え。何もせずただ見ているだけの者を傍観者ということを知り、傍観者もいじめに加担していることになることを確認する。初めにもどし、うわさには真偽の不確かな内容が多いことから、見知らぬ人のうわさであっても、不用意に信じてしまうことは、当事者や近いものをとて不快感で悲しい気持ちにさせるいじめであることを理解させる。続いて情報モラルのコラム「あなたはだーれ」を読み、インターネットに同様の落書きや根拠のないうわさが存在することに気づかせて、良くないうわさや落書きはいじめであることを確認する。そこで、「これから自分はうわさに対してどのように対応すればいいのか」を考えさせれば、おのずからねらいにたどり着くことになる。

5 最後に

思いやりの心が育ちにくい時代である。テレビではタレントが困るような場面を設定して、みんなが笑っている番組もある。スキャンダルで政治が動くこともある。しかし対岸の火事が、もし自宅だったらと思えば他人事ではいられない。情報過多の時代には、時代に即した指導が必要である。